

民族薬物資料館に所蔵される生薬に関する目録の発行

富山大学和漢医薬学総合研究所 附属民族薬物研究センター 民族薬物資料館

伏見裕利

1. はじめに

富山大学和漢医薬学総合研究所附属民族薬物研究センター民族薬物資料館は、世界の諸民族の伝統薬物を蒐集、保存、展示するとともに、それらの学術情報を収載したデータベースを構築し、伝統薬物に関する共同研究を推進している。日本の伝統医学である漢方医学や、その源流である中国医学で用いられている生薬を中心として、インド医学（アーユルヴェーダ）やユナニー医学（ギリシャ-アラブ医学）等、世界各地から蒐集した約 28,000 点の生薬標本を収蔵している。

生薬は世界各地の民族が、多くの疾病や怪我等を治療するために、また健康増進や長寿を願って、身の回りにある動物や植物、鉱物から見出してきたものである。それらの知識は、その土地の気候風土、生活環境、食生活やそれらに伴う体質等に適した薬物を長年の経験から見出してきたもので、綿々と受け継がれてきている。それ故、生薬や伝統医学に関する知識は、人類の英知であり、また文化遺産であるともいえる。

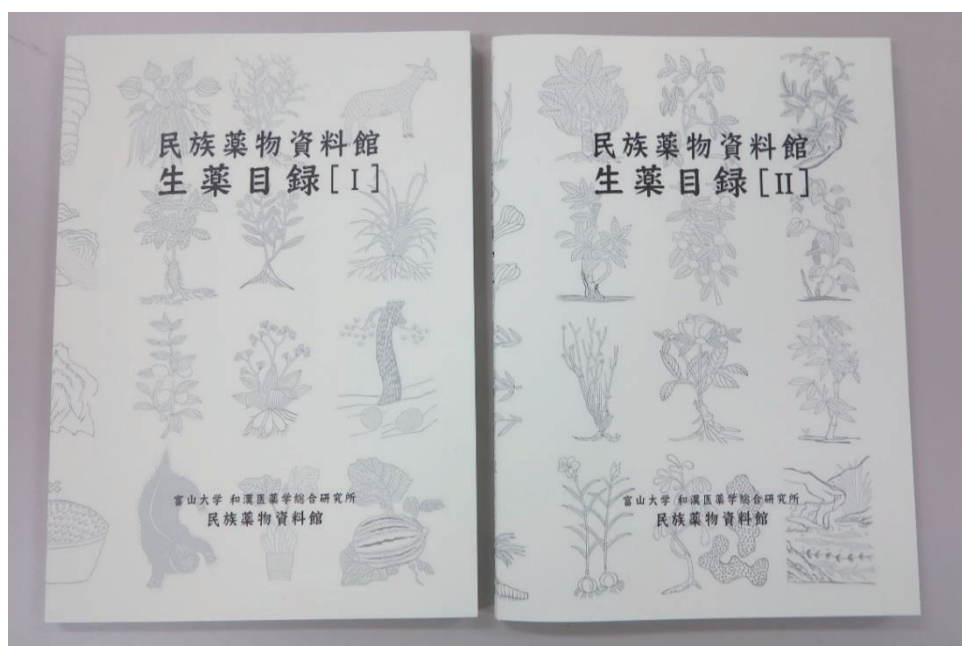
民族薬物資料館の歴史は、1973 年の和漢薬研究施設に生薬標本室を設置したことに始まる。故難波恒雄先生が 30 数年に亙り、世界の民族薬物の調査、研究を通じて現地の市場に流通していたものを購入し、蒐集してきたものである。現在でも、調査研究は小松かつ子先生に受け継がれており、蒐集の歴史は 50 年近くにも及んでいる。民族薬物は動植物などの天然物に由来するため、様々な品質のものが流通し、時には偽品も存在する。また長い歴史の中で、生薬の基源（原動植物や使用部位）は流動的であるため、本資料館の生薬には様々なものが存在しており、約 50 年の間でも生薬には基源や品質等の多様性が存在していることが理解できる。民族薬物資料館に収蔵されている生薬の多くは、購入時の生薬名、等級、産地、市場名、入手先、入手年月日、蒐集者、その他の事項について記載が行われている。また各生薬はそれぞれ民族薬物資料館の標本番号（TMPW No.）が付けられ、標本として整理されている。これらのデータは長年にわたり、生薬の蒐集、整理、保存、管理などの地道な作業の積み重ねにより蓄えられたものである。

2. 生薬目録の作成

これまで、民族薬物資料館では各種生薬の情報に関して、民族薬物データベースならびに証類本草データベースを構築している。さらにこれらの情報を基に、所蔵する生薬標本について目録を作成してい

る。今回は特に中国漢代の医聖・張仲景先生が著した原典である『傷寒論』中の方剤に配合され、かつ『經史証類大観本草』の上品に収載されている生薬 25 品目 130 点を目録Ⅰ（2012 年度）に、中品に収載される生薬 32 品目 151 点を目録Ⅱ（2013 年度）に収載している。今後は下品生薬について民族薬物資料館の生薬標本の写真とともに生薬目録Ⅲを作成する予定である。目録に収載した各生薬については一般的な情報とともに、民族薬物資料館で蒐集、保存している生薬標本の写真、ならびに生薬購入時の名称、市場名、産地、入手年を入手当時のデータに従い記載している。資料館の生薬は経年変化により、色彩や成分などは蒐集時とは異なり変化しているが、形態的特徴の多くは入手時のまま保存されている。今回生薬の選定に当たっては、現在の野生品の減少と、今後日本国内での栽培化の必要性を視野に入れ、できるだけ日本産の生薬を掲載した。『經史証類大観本草』の記載では、『傷寒論』の成立年代を考慮して、『神農本草經集注』までの文章を日本語に翻訳し、あわせて宋代の『図經本草』の附図も参考のため掲載した。

生薬目録Ⅰでは、阿膠、茵陳蒿、滑石、瓜蒂、甘草、桂皮、鷄子・鷄子黄、膠飴、柴胡、細辛、地黄、赤石脂、食蜜、人尿、太一禹餘糧、大棗、沢瀉、人参、麦門冬、朮（白朮・蒼朮）、茯苓、芒硝、牡蛎、麻子仁、竜骨の 25 品目について収載している。生薬目録Ⅱでは、烏梅、黄芩、黄柏、黄連、海藻、葛根、栝楼根・栝楼実、乾姜・生姜、桔梗、枳実、苦酒、香豉、厚朴、呉茱萸、五味子、梔子、芍薬、秦皮、水蛭、清酒、赤小豆、石膏、葱白、竹葉、知母、猪苓、通草、当帰、貝母、文蛤、虻虫、麻黄の 32 品目について収載している。なお今後発行予定の生薬目録Ⅲでは、その他の生薬約 20 種類の収載を予定している。今回の総説では、生薬目録Ⅰ、Ⅱに収載した生薬で、傷寒論に収載されている葛根湯に配合されている桂枝、芍薬、大棗、生姜、甘草、葛根、麻黄の 7 種類の生薬について抜粋して記載する。



民族薬物資料館生薬目録 [I], [II]

3 (1). 桂枝 (CINNAMOMI CORTEX)

第16改正日本薬局方には、クスノキ科 (Lauraceae) の *Cinnamomum cassia* Blume の樹皮又は周皮の一部を除いたものであると規定されている。効能・効果は、発汗、解熱、芳香性健胃、驅風薬として、頭痛、発熱、のぼせ、感冒、身体疼痛などに応用される。ケイヒ油は、矯味、矯臭薬、食用香料としても用いられる。内面の色が濃褐色～紫黒色で、初めに甘みがあり、その後で辛さを感じ、芳香のあるものが良品とされる。桂皮は傷寒論の最初に収載されている漢方方剤の桂枝湯に配合されており、最も重要な生薬の一つである。民族薬物資料館には、品質が良いとされるベトナム産の「Que」をはじめ、中国広西壮族自治区産の「東興桂皮」などの生薬がある。この他、枝に由来する「桂枝」、またスリランカ等で栽培され、ヨーロッパで紅茶やコーヒーを飲む場合に使用されるシナモンも保管されている。



No.18582 「Que」：ベトナム市場品（企辺桂 30 年） No.26011 「東興桂枝」：中国市場品

一方、『経史証類大観本草』中の『神農本草経』における記載では、「牡桂」および「菌桂」が収載されており、『名医別録』では「桂」が収載されている。そのため『神農本草経集注』が編纂された時代では「桂皮」に関して3種類の記載が存在していたことになる。その後の本草書では、「桂」を中心に統一した記載が行われている。『経史証類大観本草』における「桂」の記載の日本語訳を以下に記す。

『経史証類大観本草』12巻 木部上品【桂】

〔名医別録〕 桂は味が甘、辛、性が大熱、小毒がある。中を温め、肝肺の気を利し、心腹の寒熱、冷疾、霍乱、転筋、頭痛、腰痛を主る。汗を出し、煩を止め、唾、欬嗽、鼻鼈を止め、能く墮胎させ、骨節を堅くし、血脈を通じ、疎不足（通りの悪いもの）を理す。百薬を宣導し、畏れる所は無い。久しく服すれば、神仙となり老いない。桂陽に生じる。二月、八月、十月に皮を採取して陰乾する。

〔雷公薬対〕 人参、麦門冬、甘草、大黄、黄芩を得れば、中を調え、気を益す。茈胡（柴胡）、紫石英、乾地黄を得れば、吐逆を療じる。

〔陶隱居（神農本草経集注）〕 『神農本草経』を按ずるに、ただ菌と牡の二つの桂だけがあるが、桂とは用（用法）と体（形状）は大同小異である。今、俗に用いるものに二種ある。心が半ば巻いて脂の多

いものを単に桂と名づける。薬にするのには、最も多い。用いる所は悉く前説と相応じる。『仙經』には三つの桂が並んで有る。常に服食するには、葱涕（葱汁）を以て雲母と合和する。蒸して水となるものは、正にこの種のみである。今、広州に産出するものを好しとする。湘州、始興、桂陽県のものは小桂であり、広州のものには及ばない。交州、桂州のものは形段（形）が小さく、脂肉が多く、赤くて好い。『經』に「桂の葉は柏葉のようで、光沢があり黒く、皮は黄色で、心は赤い」という。齊の武帝の時、湘州より樹を送って、芳林苑中に植えた。今、東山に桂がある。皮の気はほぼ相類するが、葉は風変わりで、亦た能く冬を凌ぐ。恐らくこれが牡桂であろう。当時の人が丹桂と呼んだのは、正に皮が赤いことを謂ったのである。今、北方では、これを重んじ、食事のつどにこれを用いる。蓋し『礼』に云う所の、「姜と桂を以て芬芳（佳い香り）となす」である。

以上、神農本草經、名医別録、そして神農本草經集注の日本語訳である。現在の市場品は、主に「桂皮」の名称で流通している。

菌桂味辛温無毒主百病養精神和顔色為證藥先聘
 通使久服輕身不老面生光華媚好常如童子生交趾
 桂林山谷巖崖間無骨正圓如竹立秋採陶隱居云交趾屬交州桂樹獨
廣州而蜀都賦云菌桂臨崖俗中不見正圓如竹者惟嫩枝破卷成圓猶依桂用非真菌桂也仙經乃有用菌桂云三重者良則明非今桂矣必當別是一物應更研訪

「菌桂」の原文

牡桂味辛温無毒主上氣欬逆結氣喉痺吐吸心痛脅
 風脅痛温筋通脉止煩出汗利關節補中益氣久服通
 神輕身不老生南海山谷陶隱居云南海郡即是廣州今俗用牡桂狀似桂而扁廣
殊薄皮色黄脂肉甚少氣如木蘭味亦類桂不知當是別樹為復猶是桂生有老宿者爾亦所未究

「牡桂」の原文

桂味甘辛大熱有小毒主温中利肝肺氣心腹寒熱冷
 疾霍亂轉筋頭痛腰痛出汗止煩止唾欬嗽鼻艱能墮
 胎堅骨節通血脉理踈不足宣導百藥無所畏久服神
 仙不老生桂陽二月八月十月採皮陰乾得人參麥門冬調中益氣得此胡紫石英乾地黄療吐逆陶隱居云按本經惟菌桂二桂而桂用體大同小異今俗用便有二種心半卷多脂者單名桂入藥最多所用悉與前說相應仙經乃並有三桂常服食以葱涕合和雲母蒸化為水者正是此種爾今出廣州者好湘州始興桂陽縣即是小桂亦有而不如廣州者交州桂州者形段小多脂肉赤好經云桂葉如柏葉澤黑皮黃心赤齊武帝時湘州送樹以植芳林苑中今東山有桂皮氣粗相類而葉乖異亦能凌冬恐或是牡桂時人多呼丹桂正謂皮赤爾北方今重此每食臘須之蓋禮所云薑桂以為芬芳

「桂」の原文

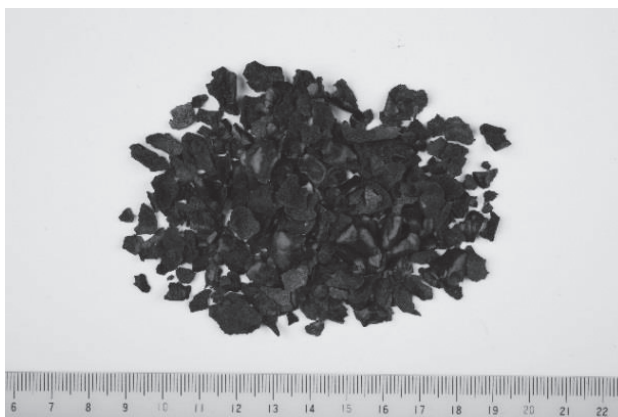
『經史証類大觀本草』中の桂皮に関する『神農本草經集注』までの記載

(2). 芍薬 (PAEONIAE RADIX)

日本薬局方では、ボタン科 (Paeoniaceae) のシャクヤク *Paeonia lactiflora* Pallas の根で、ペオニフロリンを 2.0%以上含むと規定されている。芍薬は、太く長く、真っ直ぐで質が硬く、粉性に富むものが良いとされる。又、味がしぶく苦いもの (皮付き) が良品とされる。芍薬は、鎮痛、鎮痙の他、補および収的作用があるとされ、腹直筋の攣急、胃腸の痙攣性疼痛や月経痛、四肢の筋肉痙攣、眩暈などに応用する。修治方法や産地、原植物の違い等から、真芍、皮去り芍薬、白芍、赤芍などがある。シャクヤクの花は切花として出荷できることから、数年間切花として出荷した後、根を生薬として出荷可能な品種を探す研究が行われている。

(3). 大棗 (ZIZYPHI FRUCTUS)

大棗はクロウメモドキ科 (Rhamnaceae) のナツメ *Zizyphus jujuba* Mill. var. *inermis* (Bunge) Rehd. の果実であり、外面が濃赤色を呈し、種子が小さく果肉の厚いものが良品とされる。緩和、強壯、利尿、鎮痙薬として、筋肉の急迫、牽引痛、知覚過敏を緩和し、咳、煩燥、身体の疼痛、腹痛などに応用する。市場品には、外面が濃赤色のものと、黒色に近い赤色を帯びたものが存在する。濃赤色のものは主に薬用に供され、黒色のものは食用とされる。この他に、大棗の果皮のみに由来する市場品「棗皮」も存在する。一方、新疆産には主に食用とされるものの、色は濃赤色で、長径が 5 cm 以上の巨大な大棗が存在する。



No.03078 「棗皮」：香港市場品



No.27783 「大棗」：四川省市場品 (新疆産)

『神農本草経集注』には、「大棗の皮は利し、肉は虚を補うので、湯液を調合する時には、之を劈 (つんざ) いて用いることが記されている。『傷寒論』では、桂枝湯や葛根湯の条文の記載の中で、大棗は劈いて用いるように記されている。その理由について医方書には記載が無かったため明らかでなかったが、同時期頃に書かれた『神農本草経集注』の本文中に、大棗を劈いて用いる理由が記載されていた。

(4). 生姜 (ZINGIBERIS RHIZOMA)

生姜は、ショウガ科 (Zingiberaceae) のショウガ *Zingiber officinale* Roscoe の根茎を乾燥したもので、よく肥大し、内部が白色を呈し、辛味の強いものが良品である。若い根は良くないとされる。芳香性健胃、鎮嘔、去痰、食欲増進薬として新陳代謝機能を促進し、水毒を去る目的で、嘔吐、咳嗽、脹満、腹痛、感冒、頭痛、鼻づまりなどに用いる。一方、ショウガの根茎を湯通し又は蒸して乾燥した「乾姜」は、腹冷痛、腰痛、瀉下などに用いる。漢方では裏寒の証に応用する。

古来、漢方処方では用いられる生姜は、いわゆる新鮮なショウガのことで、乾姜は乾燥品を指していた。したがって、日本市場の乾燥した生姜（乾生姜とも称す）は、漢方でいう乾姜であり、漢方処方に用いる際には、古方の分量の 1/5～1/3 が適当とされる。日本市場の乾姜は、生姜を蒸乾したもので、修治品（加工品）といえる。一方、現在中国では新鮮なものが生姜で、乾燥品が乾姜であり、日中間で修治法が異なる。

(5). 甘草 (GLYCYRRHIZAE RADIX)

甘草はマメ科 (Leguminosae) のウラルカンゾウ *Glycyrrhiza uralensis* Fisch ex DC. またはナンキンカンゾウ *G. glabra* L. の根及びストロンで、グリチルリチン酸 2.5%以上を含むと規定されている。甘草は太くて質が充実し、内部が鮮黄色で、甘みの強いものが良品とされる。甘草は、緩和、鎮痛、鎮咳、去痰、解毒薬として、腹痛、筋肉痛、痙攣痛、咽喉痛、リウマチ、関節炎、アレルギーなどに応用する。グリチルリチン製造原料や矯味原料としても広く用いられている。

甘草の飲片をそのまま、もしくは蜂蜜につけて炙ったものを「炙甘草」と称する。甘草は清熱解毒の力が強く、炙甘草は補中益気の効能が強いとされる。甘草は漢方処方でも最も繁用される生薬であり、甘草エキスは煙草、醤油などの矯味料としての需要も多い。長期間多量に服用すると低カリウム血症、浮腫、高血圧、心臓障害や偽アルドステロン症を発症する。新疆甘草は主に *Glycyrrhiza inflata* Batal の根及びストロンで、グリチルリチン抽出用とする (No. 13029)。

『名医別録』に「甘草」の別名として「国老」と記載されている。「国老」の意味については、詳細が『神農本草経集注』に次のように書かれている。「国老とは、帝王の師（先生）に当たる者の称号であり、君主がもっとも尊ぶ人である。処方中における甘草の地位が国老に当たり、諸々の薬草や薬石と安んじて和すことができ、しかも諸毒を解すことができることから、「甘草」は「国老」とも呼ばれる。」とある。そのためしばしば漢方処方中に配合され、現在使用される約 70%の処方に配合されている。

通常、市場品を入手する時には、形の整っているもの、太くて大きいもの、色、形、香りの良いものなどの特徴を有するものを主体として蒐集する傾向があるが、現在では全く見るができなくなったような市場品も存在する。そのため資料館で蒐集してきた生薬を見ると、各種生薬で、各々の生薬を取

り巻く周辺環境の変化の一端が垣間見える。現在市場に流通する甘草の多くは最大径が 10 mm 程度の細いものが主流であり、最大径が 30 mm 以上のものは全くと言ってよいほど流通していない。このことから、甘草の標本を比較するだけでも、数十年の間に市場品の太さが減少してきていることがわかる。このような状況は甘草で顕著であり、それ以外の生薬でも観察される。



No.07573 「特級甘草」：香港市場品。最大径 30 mm、長さ 45.3 cm。



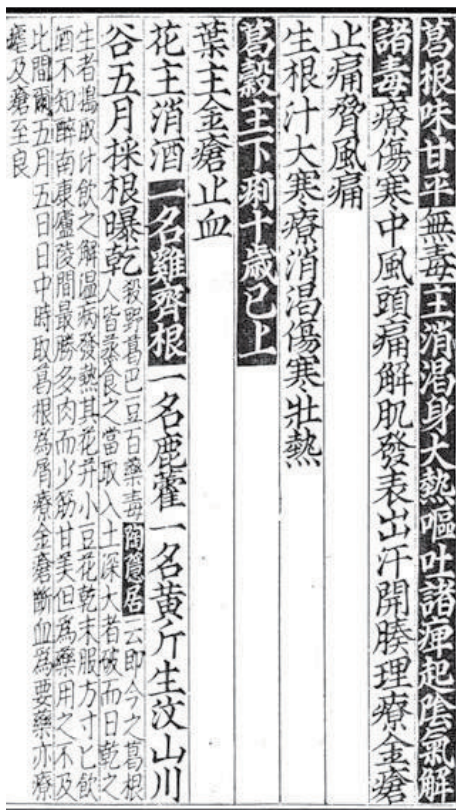
No. 13029 「甘草」：新疆市場品。最大径 210 mm、長さ 68.0 cm。

(6). 葛根 (PUERARIAE RADIX)

マメ科 (Leguminosae) のクズ *Pueraria lobata* Ohwi の周皮を除いた根である。葛根はプエラリン 2.0%以上を含むと規定されている。白色でデンプン質に富んだ品が良品である。褐色のものや、繊維質のものは良くない。

葛根は、発汗、解熱、鎮痙薬として、感冒、発熱、項背強急（首筋や背肩の筋肉の凝り）などに応用する。近年、クズは道路わきの斜面や、立木にからみついて繁茂しているのをしばしば見ることがある。以前、牛や馬を労働や交通手段などに利用していた頃は、クズは牛馬の食料になっていた。しかし、最近では牛馬に食べられないことがないので、繁茂するようになったようである。立木にかぶさると、木を枯らすことがあるので、造林の際には害になることがある。これらのクズの根は細すぎるために、クズデンプンの抽出には不向きである。クズの太い根からは、クズデンプンが得られ、クズ湯などに重用される。

本草書の記載では、『神農本草経』には、「葛根」、「葛穀」が収載され、『名医別録』には、「葛根」の他、葛の「生根汁」、「葉」及び「花」が収載されている。一つの植物で薬用部位が数種類あり、それぞれの部位で異なる薬効が記載されている植物（生薬）は稀である。中でもクズの花には、酒毒を消す効果があると記載されており、興味深い。



『經史証類大観本草』 8巻 草部中品之上【葛根】

〔神農本草経〕

葛根は味が甘、性が平。消渴、身体の大熱、嘔吐、諸々の麻痺を主る。陰気を起こし、諸毒を解す。

葛穀は十歳以上の下痢を主る。

別名は雞齊根。

〔名医別録〕

無毒。傷寒の中風による頭痛を療じ、解肌（肌表の邪を解す）や發表によって汗を出させ、腠理を開き、金瘡（刀傷）を療じ、脇痛や風痛を止める。

生根の汁は性が大寒。消渴、傷寒による壯熱（高熱）を療じる。

葉は金瘡の止血を主る。

花は消酒（酒毒を消す）を主る。別名として鹿藿、黄斤がある。汝山の川谷に生じる。五月に根を採取して、曝乾する。

〔『經史証類大観本草』 葛根の原文〕

〔雷公薬対〕

野葛は巴豆、百薬の毒を殺す。

〔陶隠居（神農本草経集注）〕

今では、人は皆葛根を蒸して食する。土中深くに入り込んだ大きいものを取るべきで、破って日で乾かす。生のは搗いて汁を取って飲む。これは温病による発熱を解す。葛根の花と小豆花を乾かして粉末にし、方寸の匙で服用すれば、酒を飲んでも酔わない。南康地方と廬陵地方のもののは最良品で、多肉で筋が少なく、甘美であるが、薬用としては比間のものには及ばない。五月五日の日中に採取した葛根を砕いて屑粉にしたものは、金瘡を療じ、断血の要薬である。亦た瘡及び瘡の治療にも至って良い。

（7）. 麻黄（EPHEDRAE HERBA）

マオウ科（Ephedraceae）の *Ephedra sinica* Stapf、 *E. intermedia* Schrenk et C. A. Meyer 又は *E. equisetina* Bunge の地上茎である。エフェドリン及びプソイドエフェドリンの総アルカロイド 0.7% 以上を含むと規定されている。現在、麻黄は資源量の減少から、国内での栽培が試みられている。

麻黄は、六陳の生薬の一つであり、陳久のものが良いとされる。使用する場合には、節の部分を取り去ってから用いる。効能・効果は、発汗、解熱、鎮咳、鎮痛薬として、皮膚の排泄機能障害による呼吸困難、喘咳、喘息、悪寒、身体疼痛、骨節痛などに応用する。

傷寒論に記載されている葛根湯の条文には、麻黄を用いる場合、節を去ること、また湯液を煎じる場合に出る上沫を去ると書かれている。この理由については、本草書に次のような記載がある。

〔陶隠居（神農本草経集注）〕

「今、青州、彭城、滎陽、中牟に産出するものが勝れている。色が青く、沫が多い。蜀中にもあるが、好くない。用いるときは、節を折って取り除く。節に止汗作用があるためである。先ず煮て、一回または二回沸騰させ、上沫を去る。沫が人を煩わせるためである。根にも止汗作用があり、夏には雑粉として用いる。世俗では傷寒を療じるのに用い、解肌には第一のものである。」と記されている。麻黄の節を去り、煎じたときの泡を去る理由について、本草学的な見地から記載がされている。

以上、7種類の生薬について生薬目録〔I〕および〔II〕の内容から抜粋し、一部改変して記載した。この他の生薬の記載内容については生薬目録〔I〕、〔II〕を参照いただければ幸いである。

謝辞

生薬目録の作成には、富山大学和漢医薬学総合研究所附属民族薬物研究センター民族薬物資料館で作成している「民族薬物データベース」ならびに「証類本草データベース」のデータを一部使用している。また「証類本草（経史証類大観本草）」の翻訳は、NPO 法人文字文化協會の協力をいただいた。ここに記して、感謝の意を表する。

本目録及び総説を作成するに当たり、長年にわたり民族薬物資料館の生薬の蒐集、整理、保存、管理等にご尽力されてきた諸氏に深謝する。

参考文献

1. 難波恒雄著、『和漢薬百科図鑑〔Ⅰ〕』、保育社（1993）
2. 難波恒雄著、『和漢薬百科図鑑〔Ⅱ〕』、保育社（1994）
3. 難波恒雄監修、富山医科薬科大学和漢薬研究所編、『和漢薬の事典』、朝倉書店（2002）
4. 厚生労働省、『第16改正日本薬局方』（2011）
5. 財団法人日本公定書協会監修、日本漢方生薬製剤協会編、『改訂 一般漢方処方の手引き』、じほう（2009）
6. 財団法人日本公定書協会監修、日本漢方生薬製剤協会編、『改訂 一般漢方処方の手引き 平成22年4月1日通知（加減方追加）対応追補版』、じほう（2010）
7. 大塚敬節著、『臨床応用 傷寒論解説』、創元社（1986）
8. 財団法人日本漢方医学研究所著、『金匱要略講話』、創元社（1988）
9. 岡西為人著、『本草概説』、創元社（1983）
10. 陶弘景校注、小嶋尚真、森立之ら重輯、岡西為人訂補、『本草経集注 全七巻 原寸影印版』、南大阪印刷センター（1973）
11. 唐慎微撰、『経史証類大観本草』、光緒30年（1904）、柯氏重校刊本
12. 国家薬典委員会編、『中華人民共和国薬典 2010年版』、中国医薬科技出版社（2010）
13. 葉定江、張世臣、『中薬炮製学』、人民衛生出版社（1999）
14. 富山大学和漢医薬学総合研究所民族薬物資料館 民族薬物データベース
(http://ethmed.u-toyama.ac.jp/Search_jp/)
15. 富山大学和漢医薬学総合研究所民族薬物資料館 証類本草データベース
(<http://ethmed.u-toyama.ac.jp/honzou/>)
16. 小松かつ子、朱姝、伏見直子、伏見裕利、民族薬物資料館生薬目録〔Ⅰ〕、（2013.3）
17. 小松かつ子、朱姝、伏見直子、伏見裕利、民族薬物資料館生薬目録〔Ⅱ〕、（2014.3）